

在職障害者の余暇支援 ～ベビーリーフの活動～

○村上 想詞（ベビーリーフ 会長）

小林 恵子・若山 由美・野澤 寛未・渡邊 美香・今泉 和世・伊吹 康二（ベビーリーフ）

1 はじめに

「令和4年度障害者雇用状況の集計結果」では、民間企業における雇用障害者数、実雇用率ともに過去最高を更新しており、雇用障害者数は61万3,958.0人となっている¹⁾。一方、障害者職業総合センターが行った調査では、就労継続支援A型（以下「A型」という。）を除く一般企業における就職後3か月時点の定着率は76.5%、就職後1年時点の定着率は、58.4%であり²⁾、法定雇用率の引き上げ等の雇用機会を増加させるだけでなく、職場定着をいかに図っていくかが重要となっている。

職場定着支援については、地域障害者職業センター等によるジョブコーチ支援、障害者就業・生活支援センターによる定着支援、障害者総合支援法に基づく就労定着支援事業などさまざまな社会資源がある。一方、筆者は一般就労する障害者（以下「在職障害者」という。）の職場定着支援を行う中で、休日等の余暇活動が就労のモチベーションや職業生活の満足度に影響を及ぼすなど、ワークライフバランスの重要性を感じることが多い。しかし、在職障害者が利用できる余暇活動に係るサービスや社会資源は少ないのが現状である。そのため、私たちは在職障害者の余暇活動を支援するボランティア団体（以下「ベビーリーフ」という。）を立ち上げ、令和4年12月より活動してきた。

また、福祉的就労の場における余暇支援の考え方や実態に係る調査結果は見られるものの³⁾、在職障害者の余暇支援の考え方や実態を調査した結果は見られなかったため、本発表では、当団体の活動とともに、在職障害者に実施した余暇活動に係る実態調査の結果について報告する。

2 ベビーリーフの活動

(1) 活動の目的

在職障害者の余暇活動等の支援を通して、家庭及び職場外における交流の場の提供、並びに休日における余暇の充実を図ることで、人生の質及び在職障害者の就労に対するモチベーションの向上を目的としている。

(2) スタッフ

障害者職業センター、障害者就業・生活支援センター、就労移行支援事業所、企業の方だけでなく、当事者も運営側の構成員として参加している。

(3) 会場

屋内活動は、社会福祉協議会ボランティアセンターから会議室を借りて行っている。なお、会議室はボランティア登録をすると無償で借りることができる。

(4) 活動日

毎月第3又は第4土曜日に活動している。

(5) 参加者

今年度は試行実施ということもあり、運営する構成員や目的に賛同する障害者就業・生活支援センターや就労移行支援事業所から支援している在職障害者にリーフレットを直接手交する方法で参加者を募っている。現在、平均して5～6名（男女比は概ね半々）が活動に参加している。

(6) 活動内容

活動開始当初は、話したいテーマを設定したディスカッションを中心に行ってきたが、令和5年6月以降は参加者でやりたいことを話し合い、翌月に話し合いに基づく屋内外でのレクリエーション活動を行っている。

3 在職障害者の余暇活動に係るアンケート調査

(1) 対象

余暇支援の希望の有無に関わらず、在職障害者（A型を除く）を対象に、障害者就業・生活支援センター、就労移行支援事業所などの協力を得て33名の方にアンケートを実施した。構成などは表1、2のとおり。

表1 対象者の性別及び年代

	10代	20代	30代	40代	50代	合計
男性	1	13	8	2	1	25
女性	0	3	2	3	0	8

表2 対象者の障害種別

身体	知的	精神	発達	知的精神	知的発達	精神発達	その他
2	9	6	8	2	2	3	1

(2) アンケート内容及び結果

アンケート内容及び結果は図1～3のとおり。

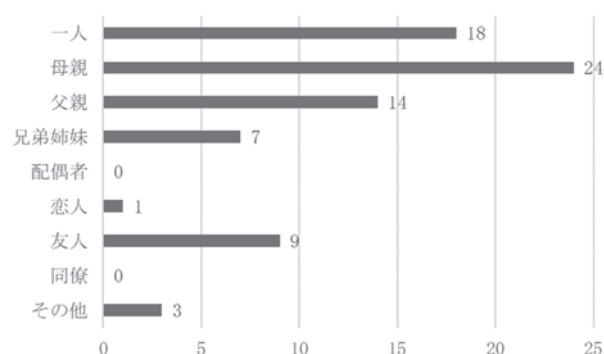


図1 休日と一緒に過ごす主な相手（複数回答可）

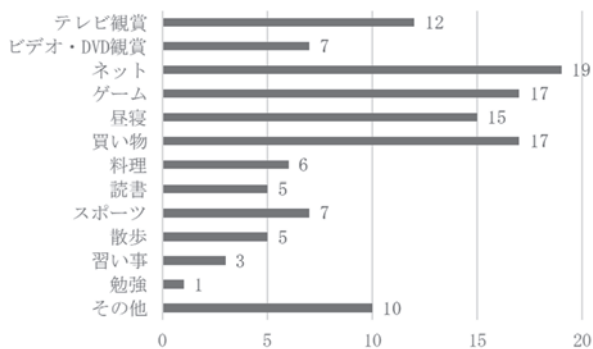


図2 休日に行う活動（複数回答可）

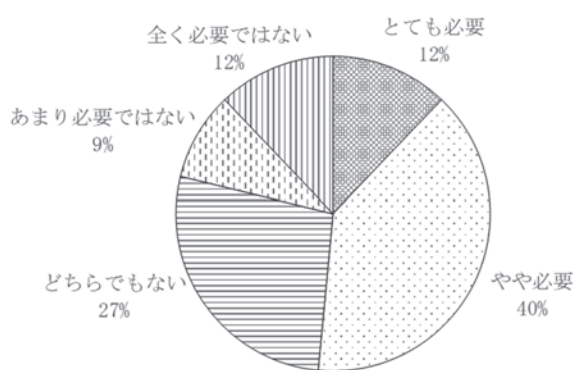


図3 余暇支援の必要性

4 考察

(1) アンケート調査の結果について

過半数の在職障害者が余暇支援を必要と回答をしており、余暇支援の必要性を支持するものと考えられた。

また、休日は一人若しくは両親や兄弟など親族と過ごすことが多いことや、休日の活動内容がネット、ゲーム、テレビ観賞など自宅内で完結する活動が多かったことから、交流範囲や活動内容の幅が狭いことだけでなく、活動範囲も限定されている可能性が窺われた。

(2) ベビーリーフの活動について

ベビーリーフでは、臨床上で感じた余暇支援の必要性や上記(1)の内容などを踏まえて、多様な方と話せる集いの場を設定し、トークテーマから話したいテーマごとにグループを組んでディスカッションを行ってきた。

ある対象者は話すことに苦手意識を持っており、職場内では同僚と十分に話すことができなかった。しかし、ベビーリーフでは活動自体は本人の能動性に任せられているもののトークテーマなどある程度の枠組みが設定されていることから、話す内容を事前に考え、かつ一方的にならないよう時間配分を意識するなど、定着支援で関わっていた私たちが驚くほどスムーズに話をされていた。ベビーリーフでは、能動性が重要となるため、ご本人の持つ可能性やそのポテンシャルに驚かされることがあった。

一方、毎月ディスカッションを中心に活動すると、話題が尽きること、共通の話題がない参加者同士は交流が持て

ないことなどの課題が生じていた。上記(1)において交流、活動内容及び活動範囲の幅が狭いことが窺われたことから、隔月でレクリエーションを行い活動内容及び活動範囲の幅を広げるとともに、ディスカッションの中で実施したいレクリエーション内容や計画を話し合うなど、共通の目的のもと幅広い参加者同士で交流できる工夫を行った。それにより交流、活動内容及び活動範囲の幅を広げられただけでなく、ディスカッションも話題が尽きることなく、盛り上がりを見せるといった効果が得られた。

5 今後の展望

ディスカッションとレクリエーションを交互に行う形式での活動はまだ始まったばかりであることから、現状の形式を継続して、参加者の満足度や課題などを検証していく予定である。周知範囲についても今後は更に広げるなどより多くの参加者を募っていきたいと考えている。

また、現状ではスタッフが司会・進行のほか、レクリエーション等の準備を行っているが、今後は、スタッフ、参加者などの垣根を無くし、運営部分についても可能な範囲で参加者に協力を求め、最終的には参加者自身が能動的な余暇活動を行っていきける土壌を形成していきたいと考えている。

更に、ベビーリーフの立ち上げ～運営までで得た知見や経験を生かし、余暇支援に少しでも興味のある方々に対してノウハウを伝えることも検討している。在職障害者の余暇支援が少しでも全国に広げられるよう普及活動を行い、在職障害者の職業満足度の向上やワークライフバランスの充実などに寄与していきたい。そのためにもベビーリーフの活動前後で参加者の職業満足度やワークライフバランスがどのように変化したか調査し、今後報告を行っていきたいと考えている。

【参考文献】

- 1) 厚生労働省『令和4年障害者雇用状況の集計結果』（2022）
- 2) 障害者職業総合センター『障害者の就業状況等に関する調査研究』、「調査研究報告書No.137」, (2017)
- 3) 佐藤綾美・名古屋恒彦『福祉的就労の場における「余暇支援」の課題』,「岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第13号」, (2014), 225-234

【連絡先】

村上 想詞
ベビーリーフ ー在職者の余暇サポーター
e-mail : babyleaf.yoka@gmail.com